

時評

# 駅 週 情 報

第2号

目次

一時評

時評

二、駅週の周辺を探る

ドラマ「エトロフは運なり」

1

三、駅週制度の探求

特異な形態の駅務を探る

2

四、車両局からの連絡

3

## 駅週の周辺を探る

ドラマ「エトロフは運なり」の周辺を探る

一灯篭駅週の取扱人は女性

- タイトルは忘れたが、毎日新聞の朝のテレビ番組で、映画監督の振舞家入氏が、「老人といわれる年齢になつて考えることは、人間は、年を重へてから出でてくる才能がある。私は現在、若い三十歳代の人達と一緒に映画を振り継げているが、若い人は若い人。老人は老人の分野で活動面があると思っている。むしろ、それぞれの分野でないと解らないこと、理解できないことがある」と、いうのである。
- 私は、これを聞いて我が意を得た想いで、喝采した。
- 私は、これまで数回テレビに出演したことがある。その古い、アナウンサーが、私を郷土史研究家として紹介しようとするので、その口では、交通通信史を研究している者であつて、郷土史は研究していない。と訂正してもらつている。
- 私は更うに、郷土史は、限定した地域における広い分野にわたつて発生する事象を研究対象としているのに対し、交通通信史は、人類の進歩と共に変化してきた社会生活のうちでもも交通通信に限定しての発達過程を研究するもので、前者が坐つて幅広い分野を対象にしているのに對し後者は極めて細かく、反面、確実で奥深い交通通信という分野を対象にしているといふると聊うのである。

佐々木道著「エトロフ愛蔵の事」という題名の小説がある。読みたことのない人でも、これを題材にしたテレビドラマ、記口靖子主演「エトロフは運なり」は見た人が多いであろう。舞台は、エトロフ島と東京を中心とする本州との二つに分かれて展開するが、エトロフ側は灯篭駅週が中心である。時は、日米開戦直後である。主人公の岡谷ゆきは、エトロフ島出身、岡島ヒリカップ商店に面した漁村、灯篭駅週取扱人の娘として生

主めた。

さて、本会報は、小説の紹介を目的とするものではない。この小説には、「駅通に関する様々な問題が内在し」、時に「昭和初期における駅通の現状、旅行者の動き等が記述されていて当時の駅通の置かれている環境がよくわかるので、これを取り上げて、具体的に解析しようと思うのである。

灯籠駅通には、天草・宿別・年賀・内保等の駅通が登場するが、主にこれで、エトロツ島の危険を表現しておくと、千島列島の南部、本道の野村半島から海上を北東へ百五十キロの地点にある。本道側からすると千島列島二つの日の、列島中最狭大の島であり、同島には、一万多に跨る十六か所の駅通所がある。右、灯籠駅通の駅通はいずれも実名で登場するが、灯籠だけは表在しない駅通の名前である。知らん人もあるうと想うが、どうマでは、根室支庁管内別海町所在の鹿内口駅通が、灯籠駅通に代って登場していく。同駅通には、現在でも、ドラマ撮影時使用の灯籠駅通店名による、「宿泊料金表」が掲示されているほか、当時の小道其類が展示されている。

灯籠駅通に訪問を戻すと、同駅通は、ゆきの伯父伝三郎が取扱人をし、かたわら卸販店を經營していた。駅通は、南泊と獨立の双方を営業して、鹿内用として官馬十二頭、札馬三十頭を所有し、駅合には、宿泊用の部屋八つ、十六人の旅行者を泊めることができるとしている。駅通の運営はタリル人の官道が一切を取り仕切り、ゆきは駅通の手を担当していた。

さて、灯籠駅通取扱人の伝三郎死亡後、初七日がすむと、ゆきが駅通取扱人を相続することとなり、灯籠から約三十キロ離

れた留別村役場にその手綱きに赴いた。留別は、馬で七時間の地図にあり、途中、年齢で駆馬を乗り替えた。ゆきは、當時二十四歳であった。

留別駅通で一泊、その翌日、役場に行き事務手続をすませ、ゆきはここで正式に官設駅通取扱人になった（筆者注：手綱きをするますと、即、駅通取扱人になったとは思われず、支庁の採用手続を経て、道府長官の任命手続が必要であるが、小説はこの点省略されている）。次に、当時の荷物利用者はどこのような職種の人達であったのであらうか。同書によると、公務員・行商人・島内の漁業人足等であり、ときには、大学の研究者・春山家・自然爱好者等が駿泊したという。荷物は、方々の漁場へ運ぶ日用品・漁場用器具が多く、（ヒリカラブ青海に陸上げしたのであらう。）産出元は本州からのものが大宗を占め、灯籠駅通ではこれを駿通の駄馬に振り分けに積んで、次の駅通を担当するのであるが、商人達は十頭、二十頭分の荷を駄馬に積んで行くのが普通であった。それで、多數の馬が必要であり、宣造がつゞく算山の牧場に放牧されている馬を集めてきて便覧していた。

前述の手続を経て、ゆきが駅通取扱人に就任したが、女性が度庚人採用されることは、著者「北海道宿駕（駅通）制度の研究」（下巻）に評述してあるので、この点は、同史に譲ることとして女性取扱人の任用は、千島列島ではこれが最初のことである（別項のとおり、千島では、前後を通じて二名の女性が取扱人に就任している）。

さて、前述のとおり灯舞という名称はエトロフ島内には存在せず、小説上においては、他の駅通名が実名であるのに對し灯舞のみ仮名の名称を使用している。では、灯舞をモデルとする実在の駅通があるのであろうか。これを解明するのも興味があるので、取り上げて見ることにする。

灯舞駅周辺を略図にすると、次のとおりであるが、この圖でわかるとおり、小説上に、実名で出てこない駅通は、入里助とダヤの二か所で有る。この二か所のうち女性取扱人が實在したのは入里助駅通の経験を私の手持ち資料で調べてみると、明治三十八年十一月開設、終戦時ソ連により接收される。この間の駅通取扱人は①杉本二助、②杉本与四郎、③杉本キヨ、④大柳栄三郎の順で任用されている。キヨは、大正四年一月一日任用、昭和十四年五月二十九日解任、四代大柳栄三郎に引き継ぐとあって、小説上では「④と⑤が入れ替つているようである。これは、小説の筋書き上、キヨと栄三郎の在任を逆にした方が面白くなると見たのであらうか。いずれにしても、右の推測から灯舞駅通は入里助駅通であると断定したがいかがである。

なお、疑問が残るのは、灯舞から後堤所在地の隔別までは三十キロの距離にあると記述されているが、實際には、左圖のとおり約十六里（六十キロ）となり、小説上の距離の約二倍になっている。また、前述のとおり、灯舞駅通の駅舎客室は、八部屋、十六人取客とあるが、入里助の部屋数は明かでないが、広さは四十七、五坪であり坪数からみて同程度の客室があつたものと解される。

灯舞駅周辺を略図にすると、次のとおりであるが、この圖でわかるとおり、小説上に、実名で出てこない駅通は、入里助とダヤの二か所で有る。この二か所のうち女性取扱人が實在したのは入里助駅通の経験を私の手持ち資料で調べてみると、明治三十八年十一月開設、終戦時ソ連により接收される。この間の駅通取扱人は①杉本二助、②杉本与四郎、③杉本キヨ、④大柳栄三郎の順で任用されている。キヨは、大正四年一月一日任用、昭和十四年五月二十九日解任、四代大柳栄三郎に引き継ぐとあって、小説上では「④と⑤が入れ替つているようである。これは、小説の筋書き上、キヨと栄三郎の在任を逆にした方が面白くなると見たのであらうか。いずれにしても、右の推測から灯舞駅通は入里助駅通であると断定したがいかがである。

実は、著者「北高通宿駅（駅通）制の研究」においては、法規上の解説、上巻下巻の問題に紙数を割かれ、現地における駅通所の管理運営、旅行者の利用状況等の解説が十分でなかつたと認められたことであつて、今回、この点を補完する意味で、この小説を取り上げ執筆のである。

### 駅通制度の探求

#### 特殊な形態の駅通を探る（II）

##### 一 女性取扱人の任用（I）

駅通取扱人の採用資格は、明治三十三年六月制定の「駅通所規程」によると、「成人男子であつて土地、又は家屋を所有し、駅通を運営するに必要な設備をすることができる資力と有する者」とある。しかし、このうち明治三十八年改正の駅通所規程では、「第十七条駅通取扱人ノ業務ハ家督相続人之レヲ繼承スルモノトス」とあって、家督相続人のきいに限つて男女の差別、年令の制限はなくなつてゐる。下巻（完結編）三二五ページにこの点詳述しておいたとおり、未成年であるつと、女性であるうと家督相続人の場合に限つて、駅通取扱人に就任する資格を有する、というのである。個々の駅通について検討を加える前に、明治時代以降において女性の駅通取扱人を採用した駅通所を挙げると、次のとおりである。

なお、下巻においても女性取扱人の一覽表を掲げておいたが、紙数の都合で、至つて簡単に記述しておいたので、今回は、これを補完する意味もつて解説を繰り詳細に掲げることにした。

#### （一）女性であることがおおむね確認できるもの

開設年次に開設されたもの

駅通名	住所	開設年月	廃止年月	女性取扱人在職年月	女性取扱人氏名	備考
廣瀬駅	原中郡	M一七・四	M三五・一一	○	大竹カツ子	(○) 内の数字は女性取扱者
多度志駅	南伊那郡	M一七・二	S三三・八	T三・八	鶴田好	の任職位である
向瀬駅	前田郡	M一三・一	T一四・五		初今井ジム	
勝路駅	川上郡	M一八・六	S三・六		初中村サト	
高見(日) 高見駅	一ノ五・三	S五・六			○渡辺良子	
片無去駅	厚岸郡	M一三・一	S二・六		○小川つる	
陸岩駅	中川郡	M一六・七	S六・一〇		○島瀬フジン	
水口駅	轟町	M一八・一〇	新成に上の轟町	S一・三・三	○佐藤千ヨ	S二・一在職 会報五号
人里駅	沢尻郡	M一九・二	同	T四・一	S一四・五	○杉本キヨ S八・九在職 会報二号
金山駅	立野郡	M三二・八	S三・一〇	T(11)・10	○鷲内タニ	T一三・三在職 会報二号
東馬(1) 駅	東馬郡	M三七・三	S二・八	○弓田ハジ		
雷電駅	轟内郡	M四〇・一	S六・一〇	S(2)・一	○工藤ソノ	S一三・一在職 会報四号
越別原野駅	枝幸郡	M四五・七	S九・九	S九・九	○近藤ユキエ	S九・一在職 会報四号

以下「2大正昭和年代に開設されたもの」と縦くが総数の關係で次第に羅り下げて記載することとした。

- 車両室からの連絡  
1、創刊号の記事記述  
「駅運営」創刊号「ページの末尾から二行目、島義の文初代開  
拓使長官と書いたが、最初の開拓官の誤りなので訂正する。  
2、調査依頼相次ぐ

- 2、白樺町所在上善助商店に開設調査しているが、支那が豈とんでもなく取扱に否認している。支援してほしい(尾関一男氏)という依頼があった。同様のことでお困りの方は御遠慮下さい。協力しまます。

- 1、創刊号でも紹介したものであるがA駅頭の取扱人は廻任時、駅

員付属物作官長の付与を受けていないので、この調査方法、現  
在の所持者等も知りたい、という調査が右のはか数作寄せられ  
ている。制度廃止後、半世紀を経つのに、まだ未解決の問題があ  
るのに驚く。

発行年付日

平成八年九月一日

発行者

無料

発行者

〇〇五 札幌市東区川沿西条五丁目二之一

史学研究会

代表 李川隆雄